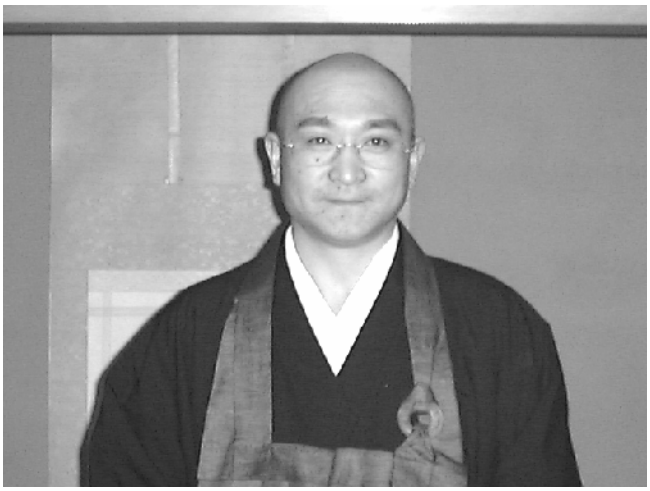
代表再任にあたって

ビハーラ代表　袴田俊英



一昨年の総会の席で代表の任期を2年と定め、本年度で任期を迎えほっとしておりましたところ、再任ということになりました。来年度からまた2年の任期を努めさせていただきます。

再任にあたり、事務局の佐藤俊晃さん、会計の秩父孝昌さんに再任をお願いしました。会計監査には今林恵美子さん、赤石玲子さんをお願いしました。2年間よろしくお願いします。

昨年の目標は『みんなで作るビハーラ』でしたが、十分達成されたとは言い難い面がありました。本年も同じテーマを掲げて、会員の皆様の意見が反映され、それぞれが参加できるビハーラにしていきたいと思います。会員の皆様の関心のあるところは、それぞれ違うことでしょうし、それぞれに問題意識を持って入会されたことだろうと思います。全てにビハーラとして対応していくことは出来ないかもしれませんが、違う切り口からそれぞれの関心ある問題について考えていくということも出来るのではないでしょうか。セミナーのテーマも様々なですが、是非参加して頂きたいと思います。

佐々木宏幹先生の公開講座の講演録作り、リポートのダイジェスト版の発行と本年も様々な計画が立てられています。また、リポートの発送作業、バザーのお手伝いなどその時々でお願いの連絡を致しますので、御協力いただきたいと思います。もちろんレクレーションも計画していますので、たくさんの方の参加を期待します。

任期中にビハーラも10年を迎えることになります。これまでを振り返り、これからを考え、さらに活動を充実させていけるよう頑張りますので宜しくお願いいたします。

ビハーラセミナー

“福祉の転換期に、これからを考える”

―よりよきパートナーとして―

秋田市　特別養護老人ホーム「南寿園」施設長　　三浦　正樹先生

9月29日　鷹巣阿仁広域交流センター

現在南寿園園長の他、日赤短大、秋田大学の非常勤講師、秋田市男女共生社会懇話会委員などもお勤めになっておられる先生です。

「介護保険施行後の老人福祉施設現場での出来事を中心に、今こそ福祉は形からこころの問題に移っていくことが必要」という主題のもとでのお話でした。

柔らかい物腰でいながら歯切れの良いお話ぶりに、思わず引き込まれる雰囲気でこのセミナーは行われました。

はじめに

私は大学を卒業して35年くらい、この道だけで生活してまいりました。子供の仕事、地域の仕事、団体の仕事、そして知的障害、鷹巣ですと吉野学園と同じような施設、若竹学園というところや、老人ホーム等色々なところで仕事をさせていただきました。

私は今、老人ホームに勤めていますが、老人の問題については皆さんは関心があり、介護保険についてもいろいろ論議されています。その介護保険の中で老人の問題や介護の問題が出されていますが、そこだけで見ていては、大変な間違いをするのではないかということで、お話をさせていただきたいと思います。

斜めからものを見ること

私の自己紹介というよりも、生い立ちも含めながらお話したいと思います。この会はビハーラという会ですが、私はプロテスタントの洗礼を受けてまして、両親もそうです。ですからそういう中で育ってきて、そういう感覚でものを見たり話をするということを、先ずはじめに言っておいた方がいいと思います。

私は「ものを斜めから見る奴だ」とよく言われますが、やっていることが良いとか悪いとか正面からだけじゃなく、もう一つ考えてみなければならないことが沢山あるんじゃないかということだと思われます。

例えば、今オリンピック花盛りです。でも「健全な肉体に健全な精神が宿る」っていったら、俺達が相手にしている人たちは何なんだ、ということです。それから今年のオリンピックは初めて女性が参加してから百年だそうですね。その前のオリンピックには女性が参加していない。女性はスタンドから応援するものだといわれていたんだそうです。そういうところから考えていくと、歴史という時間の流れの中で、変化していくものが見えてくると思います。

例えば老人問題は大変だというのは、老人だから大変だというよりも、身体に障害を持つからいろんな問題が起こってくる。それなら障害を持つ人の問題とい

う視点で捉えたらもっと広い意味を持つんじゃないか、という問い掛けをしましたところ、私は障害者にはならない、だけど老人になる、という答えが返ってきました。何だかがっかりしましたね。もう一つ突っ込んで考えてみる、もうちょっと考えてみる事が必要じゃないかと思いますね。

「敬老」を考える

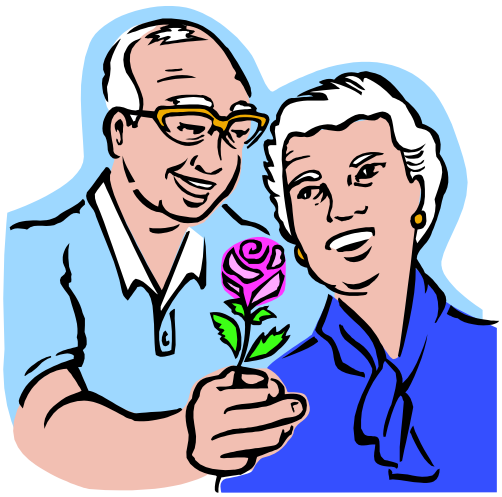
今、9月でございます。9月になると敬老月間といまして、私が一番忙しくなる月です。

敬老の月になると思い出すことがあります。9月はいやだというお年寄りがよくいらっしゃいます。なぜと聞くと、お年寄りが多くなったということ、介護を必要とする人が多くなったということを、どのマスコミも取り上げる。しかも自分は老人ホームで人の手を借りながら生活している。私は悪いんだろうか、という言葉を面と向かって言われたことがあります。

長年社会の発展に寄与してきたお年寄りを敬いましょうということで、敬老ということが定着しているんですけれども、一つ考えるとそういう痛みを持った言葉として使っているんだろうか、ということを思い知らされたことがあります。人に意味付けをして私たちが何かお祝い事をするということは、本当に良いことなのだろうか、ということを敬老の日だからこそ考えて見ようね、という話をずっとしてきた訳でございます。

昭和24、5年のころ、兵庫県の方で家族の問題として、お年寄りの問題を考えようという運動が起こりました。それが実は「年寄りの日」ということでございます。それで昭和27年ごろに「年寄りの日」を制定しようという動きがございました。その時は、別に社会の進展に寄与してきたお年寄りを敬愛しなければいけない、というよりも、お年寄り一人ひとりを大事にしていこうじゃないかというようなことがあって、最後の最後まで「年寄りの日」というのが運動の中心でした。それが祝日法案に変わるときに「敬老」という言葉に変わった、ということです。

何をもって社会の発展への寄与とするのか。例えば今回の介護保険です。なぜ40才からなのか、という疑問が私の中にあります。国民健康保険、国民年金、すべて20才からです。それでうちの若い職員達に「介護保険の支払いは、なぜあなた達に出せって来なかったんだろう」と聞いたところ、「私たちの世代の時まで、この制度は残っているのでしょうか。だったらお金を払うのはもったいない。ばからしい」という答えが返ってきました。逆を言えば、私たちは今の若い人たちに安心して、バトンタッチしようとしているのだろうか、という考えを持ちながら、話した記憶がある。



私たちは一人ひとりの命、あなたがここまで頑張ってきた人生というものは大事なんだよ、それでいいんだよ、という気持ちで敬老ということを迎えたいということなんです。社会の発展に寄与してきたらから、ということではなくて。何々をしてきたから何々をするというのは悲しい思いがします。そういうことで、ちょっと斜めからものを見たらいかがですか、って言ったの。

施設の中で

福祉の世界では大変有名な廃娼運動、秋田は廃娼宣言をした日本の第1号であります。その中心になったのが早川カイという人で、その人が婦人のための施設を作った。そこに呼ばれてきたのが、東京で福祉に携わっていた私の父と母です。私が生まれたのは昭和17年で、そこで生まれたんです。ですから私は施設の中で生まれて、そこの併設の保育園で育ちました。この世界に、私が重大な決心をして入ったというよりも、自然に入ってしまった。そういう人がそばに常に居たという事が、私にとっていい支えになっていたという思いがいたします。

そういう中で今、老人問題をやっているわけですが、昨日魁新聞に、「老人に快適な施設ですか？県老人福祉協議会が実態調査、拘束や虐待も対象」という記事が載ったが、説明をしたのは私でした。拘束や虐待があるから調査するというのではないのです。私たちがもう一回、人というものをお預かりしている中で、きちっと自分たちが意識してちゃんと向き合っているかどうか、ということを調査したかったのです。私はこの夏、

うちの職員に「あなた方、虐待や拘束をしたことがあるかい？」と聞いてみた。誰もやってないって答えました。私はそれが怖かったんです。

私どもは、常にお年寄りのそばにいます。そうすると親しいというだけで、相手の心に入り込まざるを得ない、または相手の秘密を知りえる立場にいるわけです。逆に言えばプライバシーを侵害したり、虐待しえる立場にいるわけです。それが意識されていないことが怖かったんです。

介護保険とは

介護保険が始まる前から、施設の職員の研修会で、「介護保険で私たちの現場は変わるはずがない」ということを何度も言ってきました。人間を相手にすることが、保険で変わるはずがないでしょう。制度としては変わるけど、人間の相手の仕方は変わらないはずです。だとすれば、契約だとか情報公開などは、本来あるべきはずなのです。それを私たちが怠ってきただけの話なのではないか。

つまり、介護保険で変わるということは、今までの福祉は間違っていたということになりますね。そうじゃないでしょう、確かに私たちは色々な間違いもおこ

してきた。だけど精一杯やろうとしてきた。そこだけは自信をもってきた。

時代によって福祉の思想は変わってきます。私はお年寄りに介護保険を説明するときに、自動車保険とおんなじだと説明します。ぶつけなければ出ないんだよ。ぶつければ困るからお金だすよね。なんもぶつけねがらお金戻ってくるって言うことないでしょ。そう言ったら何となく解ったようでした。

私は介護保険をこう思っています。「保険でしかないんだよ」。保険というのは、目的がはっきりしていてこれに使う、そのためにみんながお金を出します、つまり介護というものに出す。福祉に全部出すとは言ってないのです。ところが、私たちは介護保険でお金を出して、福祉全部をやってもらえるという錯覚なのです。要はナショナルミニマム（生活保障）と言われる、国が責任をとるべき問題と、一人一人の幸せの追求という問題と、そのために介護保険を利用していくという自立性というものを、きちんと整理して考えなければいけないと思います。

施設でのターミナルケア

最近、老人ホームは通過型施設である。いずれ、家族のところに帰っていく。だけど私は、最近の色々な状況から考えるとターミナルをやらなければならないと思います。今から10何年前、秋田市の医師会のシンポジウムの席上、私が老人ホームはターミナルをしなければならないと言ったら、お医者さんから袋だたきに遭った経験があります。おまえらの手を出すところじゃない、と。でも私

はいろんな選択肢があっていいと思います。

私どもの施設では、御遺体は正面玄関から出ます。正面玄関から全員で送ります。何十年の人生、本当にご苦労様でした、と送りだすのが私どもの仕事だと思っています。

見えないものに

私の両親は子供の福祉をしてきました。私は老人をやりました。私の娘は精神障害をやっています。これから必要な福祉は精神障害だろうと思います。

簡単な言い方をすれば、見えるものは誰でも同情もできる、手をかけようとするけれど、見えないものに対して、私たちがこれから心を配っていかなければならない。１番手をつけられなかったのが精神障害ではなかったか、ということなんです。

この間のバスジャックの時に、犯人は精神病院に入っていたんですよ、といえば何となくみんな納得しちゃったんですね。ああ、やっぱりそういう事件が起こるんだ、と。でも、そういう心の痛みや病気は外から見えないだけに、きちんと

やっていかないといけない。逆に言えば、心に傷害を持つ方々が、私たちの社会の中で本当に認められているかどうかということが、これからの大きな課題だと思うわけです。

長い入院生活を終えて退院した精神障害を持つ方を、どこが受け入れているかといいますと、救護施設くらいしかないんです。生活の技術やすべを失って、何10年という入院をしてきて、ハイあなた退院です、といわれた人たちが、家族の関係も切れた中で生活する場所を失っているということです。

私達はこれからの福祉を考えていくときは、見えない人たち、主張できない人たちを大事に考えていきたいということなんです。

参 加 と 共 生

最後のキーワードは、「参加」をすること。ノーマライゼーションという言葉を聞いたことがあると思いますが、これはただ同じだということではないんですね。その基本的な条件に参加ということがある。本人が参加をしているかどうかということ。

それとともに「共生」ということもキーワードだと思う。共生という言葉を考えたときに、ただ一緒に生きればいいということではなくて、質としてどう生きるかという問題ですよ。どこで生き、どこで死ぬかということも含めて。

結局、いい生活をさせることがいいことなんだということではなくて、その人が望む本当に幸せだと感ずる生活を、どういうふうにしていくかということですね。これからの私たちが考えていくうえでは、地域の、またはそこにいる一人ひとりの生き方のそばに立ち続けるかどうかということと合わせながら、社会または地球規模的な形で考えなければならないというのが福祉の課題であろうと言われています。

私達の全てのやってきたことが、本当に優しさだったのだろうかという視点に立ちながら、参加と共生という言葉をキーワードにして、四苦八苦するということに立ち向かっていかなければならない、と思っています。

ビハーラ臨時セミナー

小島剛一氏のお話を聞く会（後編）

9月18日　　鷹巣町こども風土記館

臓器移植

命が助かるためなら嘘も権利なのか･･･と考えてきますと、当然臓器移植のことが頭に浮かびます。「命が助かるために」健康な人や脳死した人の臓器をいただくというのは、移植技術上も宗教や倫理の上でも簡単な問題ではありません。私の長年住んでいるフランスでも、言語研究のために常々足を運んでいるトルコでも、侃々諤々の議論になっています。

脳死を「死」と認めない立場に立てば、生きている臓器摘出は殺人です。健康な提供者から血液だけをいただく輸血も、味方によっては「他人の生き血を吸い取って自分が生き延びる」ことですから「吸血鬼のすることであって人間のすることではない」と考えて拒否する人もいます。

「脳死が死である」と確信している人の場合でも、どんな脳死者の臓器でもいいわけではありません。問題はABO式、Rh式、MNSS式、E式などのいわゆる「血液型」（正確には「赤血球型」や「白血球型」）の適合性だけではありません。病死、老衰死した人の臓器は、機能不全で移植には使えません。若く健康な人の臓器でなければならないのですが、そうなると「若く健康な人が事故に遭うのを心待ちにする」ことになります。他人が事故に遭って、欲しい臓器以外のところに致命傷を受けて、しかも即死ではない死に方を･･･と望むのです。

「それは悪魔的なことだ。フランケンシュタイン博士の考えることだ」という人も大勢います。でもいざ自分が、あるいは我が子が臓器移植以外の方法では助からない病気に罹ったとしたら･･･と悩み、結論を出すのをためらう人もいます。

健康な提供者の臓器利用に関して、まことにあさましい事例を二つご紹介します。一つはインドが舞台です。何千人もの被害者が出ていることなのですが、予防注射などの目的でふらりと病院や診療所にやって来た人がふと我に返ると見覚えのないところで横に寝かされている。頭が重い。身体がだるくて本当に目覚めるのにしばらく時間がかかる。気がついてみると脇腹に縫い目のある傷跡がある。予告も承諾もなく腎臓を奪い盗られたのです。

もう一つはブラジル。リオ・デ・ジャネイロなどの大都市では親に捨てられたいわゆるストリートチルドレン（路上生活児）が乞食、かっぱらいをして糊口をしのいでいます。こういう子供がある日行方不明になる。一日二日経ってまた路上に現れたときには、目のあった場所にへこんだ生傷のある姿です。角膜泥棒に両目をくり抜かれたのです。

こういう文字通りの「人でなし」どものおかげで手に入っ

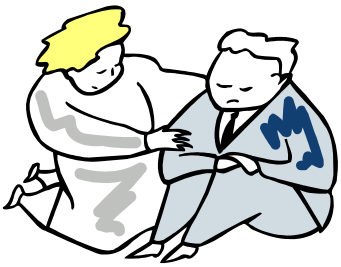
た可能性のある他人の健康な臓器を移植してもらい（自分もうすうす人でなしの仲間入りをして）それで健康体に戻れるのかというと、そうではありません。人間の身体には自分以外のものを排除する免疫機能が備わっていますから、他人の臓器に対する拒絶反応が起こります。放っておくと移植された臓器が壊死して本人も死亡します。それを避けるためには、免疫を抑制する薬を大量に投与し続けなければなりません。そうすると今度はちょっとした傷でもすぐ化膿するようになり、様々な感染症に冒されます。それを防ぐために抗生物質を何種類も大量に投与し続け･･･死ぬまで薬漬けにされるのです。強い薬につきものの強い副作用の数々に耐え苦しんで、普通の生活に戻ることはできないまま、常に医療監視され続けて、何日か、何ヶ月か、何年か後には結局死んでいきます。移植手術を受けた時点で命運は尽きたのです。

いずれ助からない患者に救いのない苦痛のみを与える医療は「仁術」ではありません。

無知な善意は仇になる

何が善で何が悪なのか、考えさせられる問題がもう一つあります。異文化・異言語社会への金品援助は期待通りの結果をもたらさないということです。具体例をご紹介しましょう。

エチオピア。何年か前に飢饉がありました。全世界から善意の人の義援金が集まりました。義援金の総額を見ると飢饉はとっくに解消したはずなのに、現地に行ってみると悲惨な状況は何一つ変わっていない。金はどこへ消えたのか。高級官僚や軍人の懐に全部収まってしまったのです。



ネパール。日本のある基金がある小学校に大きな時計を寄付しました。次の年に同じ小学校を視察してみると、寄付した時計がない。どこへ行ったのか。その小学校の校長の自宅にありました。

またある小学校に、同じ基金が学用品を寄付しました。校長にまとめて預けたのです。校長はノートや鉛筆を売って大儲けをしました。

こういうことが必ずどこでも起こるので、その基金は黒板や教師用の大型の定規、コンパスのように、学校の中でしか使い途のないものしか寄付しないことに決めたそうです。

別の村。善意の人の寄付した大量の学用品が、生徒の手に渡りました。しばらくの間は学用品を買う必要がなくなったので、学用品の行商をしていた人が生活に困りました。80キロの荷を背負って、杖で身体を支えながら山道を登っての汗だくの行商です。少しずつ荷が軽くなり、帰りは手ぶら同然で鼻歌でも歌いながら山を下りるつもりでいたのが、行けども行けどもちっとも軽くならない荷を背負い、儲けは完全にふいになって、よろよろ下山するはめになったのです。

トルコ。昨年大地震がありました。日本からも医者や看護婦を派遣したそうですね。医者や看護婦は確かに役に立ちま

す。ところが、お金や金品はどこの国でもそうですが途中でいろんな人の懐に入ってしまって、なかなか末端の被災者のところまで届かないのです。名の知れた慈善団体を通しても、人件費・交通費・輸送費・保険料などは無料になりません。慈善団体の中にも機会があればくすねようと手ぐすね引いて待っているのがたくさんいます。

確実に被災者に善意を届けようと思ったら、募金をして集まったお金の中から旅費をいただいた残額を、自分で現地で渡してくるしかありません。費やした時間とエネルギーが自分の貢献分と考えることにしましょう。その場合も、現金を渡してはいけません。マフィアや地元のボスがのさばっているような土地であれば（大概の土地は誰かがのさばっています）、被災者はピンハネされます。包帯や傷薬も、地元の薬屋を生活苦に陥れるほどの量を無料で配ってはいけません。

仮住居用のテントなどは設置場所の確保が先ですから、素人の俄か救助員の手には負えません。現地の専門家に任せることにしましょう。現地で借りた小型トラックに積める程度の食料や衣類ぐらいを、現地で買って配るのが関の山ですが、転売して金儲けができるほどの量を一度に渡さないことを忘れてはいけません。

トルコ語のできない人が、トルコに行って援助活動をしようとしても通訳を雇わなければ何もできません。通訳は、被災者のうちでも自分の近親のところに、善意の外国人金ヅルを連れて行きたがるものです。通訳がマフィアの一味だということだって大いにあり得ます。

質疑応答

Q. 外国語ができなくても、身振りや手振りで何とか意思が通じるのではないでしょうか？

A. ブルガリアでは、YESのときに首を横に振り、NOのときに首を縦に振ります。

「奥様はフランス人ではありませんね」と日本女性が日本語で質問されたら「はい、フランス人ではありません。日本人です」と答えて、首を縦に振ります。ところがこの「はい」は、イギリス語に訳すとNOなのです。質問が肯定文であろうと否定文であろうと、答が否定文ならNOと言うのがイギリス語の規則です。首は当然横に振ります。

YES、NOを示すのに首を縦でも横でもないやり方で動かす文化圏もあります。身振り手振りは決して世界共通のものではないのです。

Q. 名を名乗るときの姓名の順序のことですが、ハンガリーなどでは日本と同じように苗字の方が先だと聞きました。日本人が外国語を話したり書いたりするときに、姓名の順序をひっくり返さないで、日本の習慣通り苗字の方を先にしてもいいのではないでしょうか？

A. おっしゃる通りです。

「名・姓」でなく「姓・名」の順にするところは、ハンガリーと日本の他に韓国・北朝鮮・中華人民共和国・台湾などがあります。世界中どこへ行っても「毛沢東」は「毛沢東」であって「沢東・毛」とは誰も言わない。「江沢民」を「沢民・江」とも言いません。日本人だけが、頼まれもしないのに、自分の姓名の順序を替えるのは無意味でばかげたことです。

私は昔から自分の名前をローマ字で書

くときに、まず姓を全て大文字で、次に下の名前を最初の一文字だけ大文字、あとは小文字で書いています。これは実はフランスの習慣で、フランスでは公文書の場合は必ず姓の方が先になるのです（世界にはアイスランドのように、姓というものがない国もあります）。

つい2,3日前のテレビニュースで、日本人の名前をローマ字で表記するときに、苗字の方を先にするようにと国語審議会が答申したそうです。やっと今頃、という気がしますが、どんなに遅くともやらないよりはいいことです。

Q. キリスト教徒ではない者がナザレのイエスを「キリスト（＝救世主）」と呼んではいけない、とご著書にありましたが、それでは「キリスト教」も「イエス教」と言うべきなのでしょうか？

A. ナザレのイエスは、ユダヤ教とイスラームにとっては「預言者」であって「キリスト（救世主）」ではありません。仏教徒やシヴァ教徒にとっては「預言者」でも「キリスト」でもない普通の人間です。「救世主はイエスではない」と信じている人や救世主そのものの存在を信じない人が「マリアが救世主を生んだ」とか「救世主がヨハネと話をした」とか言うのは辻褄の合わないことです。

しかし、宗教名としては「イエスが救世主（キリスト）であると信じ崇拝する宗教」を、仏教徒などが「キリスト教」と呼ぶことに論理の破綻はありません（仏を信じない人が「仏を信じる宗教」を「仏教」と呼ぶのと同じことです）。

「イエス教」と呼ぶのも魅力的な案ですが、「イエズス会」と紛らわしくなるのが難点です。ちなみにアラブでは「ナザレ教」と言います。

Q. トルコ人は日露戦争以来、日本人に親しみを感じているそうですが、少しご説明を。

A. オスマン・トルコ帝国は何度もロシアと戦争をしてひどい目に遭いましたから、東洋の小国の日本がロシアを破ったときには大いに溜飲が下がったそうです。我がことのように狂喜乱舞したという話をよく聞きます。「敵の敵」には親しみを感じるというのは人情でしょうね。でもトルコ人が日本びいきなのはそれ以前からなのです。

1890（明治23年）のことですが、オスマン・トルコ帝国の特派使節団の船が横浜から神戸に向かう途中で難破したのです。場所は紀伊半島の潮岬の近く、大島の樫野崎岬です。使節団のうち587人が死亡し、翌朝未明までに岸に流れ着いた69人の生存者が大島の住民に救助されました。日本はこの時、犠牲者の遺体と遺品の捜索、船の引き揚げなどを手厚く行い、国を挙げて義捐金の募金をしたうえ、生存者を日本の軍艦で無事イスタンブールまで送り届けたそうです。

船の名前はエルトゥールル号。今でもトルコ人がエルトゥールル号と聞けば「ああ、あの日本の沖で難破したトルコの船･･･」とすぐ言います。樫野崎には慰霊碑も建っています。

Q. 中国人は日本人が中国のことを支那と言うと「差別語だ」と言って怒るそうです。支那という呼び名に侮蔑の意味はないと思いますが、正当な理由がないのに責めるというのは、日本人に対する差別ではないのでしょうか？

A. 支那（シナ）という呼び名は秦（シン）という国名から来ています。フランス語のChine（シーヌ）ドイツ語のChina（ヒーナ）スペイン語のChina（チーナ）

イギリス語のChina（チャイナ）などと同じ起源の言葉です。清朝の末期に孫文などもよく使っていたそうです。もちろん侮蔑の意味はありません。

他の国の人がチャイナ、チーナなどというのには別に目くじらを立てないのに、日本人が支那と言うと怒る、というのは確かに変ですね。「支那」がいけないのなら「チャイナ」もだめなはずですが、日本人が「チャイナ・タウン」と言っても怒りはしないのだから不思議です。満州人支配の清朝を倒して国号を「中華民国」としたときに、日本が「支那」と呼び続けたのを根に持っているのだそうですが、イギリスやアメリカに対して、「チャイナ」をやめて「センターランド」と呼んでくれという要求は出していません。差別待遇とと言わざるを得ません。

それにしても「中国」「中華民国」「中華人民共和国」というのは中華思想丸出しの名付け方です。これでは、昔も今も変わらず周囲の国々の民を「東夷・西戎・南蛮・北狄」と侮蔑してかかっているのではと推測する人が出てくるのも無理のないことです。　　（おわり）

ビハーラリポート＆ホームページ連動　新企画

「生老病死ー私はこう思う」

この度、新企画としまして標記のタイトルのように、生老病死にまつわる一つのテーマのもとに皆さんのご意見をお寄せいただき、ビハーラリポートとインターネットのホームページ上でご紹介するコーナーを設けたいと思います。

第１回のテーマは、

「私が入院するときに望むこと」

についてです。

早期の完治はもちろんですが治療や入院中の生活において、あるいは病院関係者や家族・友人に対してどのような希望をお持ちなのか、皆さんの思うところをお寄せいただきたいと思います。また過去の入院体験（ご家族や知人の体験も含めて）など交えてでも結構です。

このコーナーは、普段セミナー等の行事に参加できない会員さんでも意見交換の場として活用していただきたいと考えておりますので、今後のテーマについて提案いただければありがたく存じます。

お手数ですが下記まで郵送、ファックス、E-mailでお送り下さいますようお願いいたします。

★諸注意★

- スペースの都合上、お一人200字以内でお願いいたします。
- 極端なくずし字や略字はご遠慮下さい。また特にファックスで送られる場合、濃い目の万年筆、ボールペン等でお書き下さい。
- お名前を掲載してもよい方はその旨ご記入下さい。それ以外は原則として無記名（市町村名と男女の別程度）で掲載いたします。
- 特定の個人や団体、施設等を誹謗中傷するような記述はおやめ下さい。
- その他、編集の都合上一部修正・削除させていただく場合もございますのでご了承下さい。

◎送り先・お問い合わせ◎

〒018-3201　　秋田県山本郡藤里町藤琴３　宝昌寺内

ﾋﾞﾊｰﾗﾘﾎﾟｰﾄ担当　新川泰道　TEL 0185-79-1522　　FAX　0185-79-1539

ビハーラホームページ　http://www.ink.or.jp/~shoushin/vihara/

ビハーラとぴっくす

★ビハーラ総会開催

去る１月２７日にビハーラの年度総会が行われ、先述の通り代表の再任、また予算決算などについて決議されました。その後、代表の任命により事務局-佐藤俊晃、会計-秩父孝昌、会計監査-赤石玲子・今林恵美子が決まりました。今後ともよろしくお願いいたします。

平成12年度　収支決算報告

収入の部

項　目	12年度予算	12年度決算	増　減	備　考
繰越金	711,101	711,101	0	前年度残金
年会費	304,000	410,000	106,000	会員167名
利　子	1,000	94	−906	
雑収入	100	247,879	247,779	公開講座残金 バザー収益金他
合　計	1,016,201	1,369,074	352,873	

Ⅳ　雑収入の主な内訳　　1.佐々木宏幹先生公開講座残金　93,679円

2.バザー収益金　139,200円

支出の部

項　目	12年度予算	12年度決算	増　減	備　考
講師謝礼	240,000	190,000	−50,000	
会場費	40,000	27,960	−12,040	
通信費	140,000	175,170	35,170	振込手数料含
事務費	50,000	41,352	−8,648	
宿泊費	20,000	7,560	−12,440	中野先生
交通費	20,000	10,000	−10,000	デーケン先生
雑　費	10,000	5,240	−4,760	講師昼食代
予備費	496,201	45,860	−450,341	レクリエーション補助 （男鹿・藤里）
合　計	1,016,201	503,142	−513,059	

1,369,704円（収入合計）−503,142円（支出合計）=865,932円（差引残高・次年度繰越）

平成13年度 収支予算書

収入の部

項　目	12年度予算	13年度予算	増　減	備　考
繰越金	711,101	865,932	154,831	前年度残金
年会費	304,000	334,000	30,000	会員167名
利子	1,000	100	−900	
雑収入	100	100	0	
合　計	1,016,201	1,200,132	183,931	

支出の部

※今年度より支出の部の項目に変更があります

項　目	12年度予算額
講師謝礼	240,000
会場費	40,000
通信費	140,000
事務費	50,000
宿泊費	20,000
交通費	20,000
雑費	10,000
予備費	496,201
合　計	1,016,201

項　目	13年度予算額	備　考
Ⅰ,事　業　費	580,000	
1　セミナー運営費	240,000	
a 講師謝礼	180,000	30000円*6回
b 講師宿泊費	20,000	
c 講師交通費	20,000	
d 会場費	20,000	
2　リポート作成費	140,000	
a 編集手当て	30,000	5,000円*6回
b 講演録リライタ	90,000	15,000円*6回
c 用紙等	20,000	
3　臨時事業費	200,000	
a 佐々木講演録作成	100,000	250円*300部+α
b ダイジェスト作成	100,000	250円*300部+α
Ⅱ，事　務　費	220,000	
1　通信費	180,000	
2　会議費	20,000	
3　事務用品・消耗品費	20,000	
Ⅲ 雑　費	10,000	
Ⅳ,予　備　費	390,132	
合　計	1,200,132	

★事務局より★

・年会費(2,000円)の納入をお願いいたします。振替用紙を同封しますのでご活用ください。すでに納入済みの方もおりますが、その場合はご了承ください。

また3年間にわたって年会費未納かつ連絡のない方は、リポートや各種案内の送付を停止する場合がありますので、事務局・会計担当へご連絡ください。

★インド西部・エルサルバドル大地震
被災地支援バザー開催

この度インド西部グジャラート州、およびエルサルバドルで発生した大地震では、甚大な被害が報道されています。この大地震の被災地支援の一助として、恒例のバザーを開催いたしました。

3月1日に大館いとくSCにて、3月25日には能代いとくSCにて、特に能代会場ではシャンティ国際ボランティア会のご協力により、インド大地震の被災地の写真の展示も行いました。会場の提供はもとより、会場のセッティングや商品の提供など万端に渡ってご協力いただいたいとく大館・能代両店の皆さん、本当にありがとうございました。

皆様のご協力により下記の通りの収益をあげることができました。あらためて皆様にお礼かたがたご報告申し上げます。

・大館会場　439,706円　　・能代会場　175,260円　　計　620,000円(寄付金含む)

この収益は

社団法人シャンティ国際ボランティア会　(SVA)

･･･インドへ45万円

財団法人日本ユニセフ協会

･･･エルサルバドルへ17万円

を通じて被災地への義援金として送らせていただきました。

送付先の差額については、仏教またビハーラのルーツであるインドに対してより比重を置いてということと、被害の規模を鑑みてという理由でご了承下さい。

◎バザーにご協力いただいた皆さん(販売・寄付等)《50音順》◎

会場提供・商品提供等･･･いとく大館SC様・いとく能代SC様

玉林寺様　月宗寺様　源守院様　耕田寺様　実相寺様　松庵寺様
浄福寺様　正法院様　浄明寺様　信正寺様　清徳寺様　善勝寺様
宗福寺様　太平寺様　大龍寺様　長慶寺様　天昌寺様　福昌寺様
遍照院様　宝昌寺様　龍泉寺様
石田精光舎様　大渕様　木村　俊江様　斎藤　一雄様　成田様

そのほかお名前が確認できなかった方々も含めて、本当にありがとうございました。

ぶっく　れびゅう
BOOK REVIEW

震災が残したもの　6

A-yan Tokyo〔えーやんとうきょう〕編

以前このリポートでもご紹介しましたが、昨年亡くなられたSVA専務理事・有馬実成師については多くの方からその死を悼む声が寄せられました。

その有馬師の最後のインタビューとなった本についての紹介に替えて、中国地方(山口県・島根県・鳥取県・広島県・岡山県)で主に発行されている中国新聞のコラム「天風録」から引用します。

天風録　最期のメッセージ　　'01/1/25

徳山市の住職で、昨年９月に64歳で亡くなった有馬実成さん。難民・震災救援活動の先駆けだった。彼を慕う東京のボランティアグループが、刊行を続ける阪神大震災の被災者聞き書き集の巻末に、有馬さんの病床メッセージを載せる。

▲旧曹洞宗国際ボランティア会（現シャンティ国際ボランティア会）の呼び掛けで、神戸に入ったグループ。代表の福田信章さん(27)は「いつも相談に乗ってもらっていた」と言う。破壊された街で、当時、同会事務局長だった有馬さんに「ボランティアとは何か」を尋ねた。

▲初心者も隔てなく包み込む有馬さん。「解決しなくていい。分かる部分で吸収しろ」「一つの出来事も見方はいろいろある」。型にとらわれず、核心を見詰めて考えよ、との意味。活動指針より、生き方を教わった。

▲震災後、福田さんらは毎年、被災者の言葉を淡々と記録に留めてきた。傷跡を消せない人、心の闇から解放された人。95年の第一集の証言者12人が今、150人になった。

▲近刊の第六集。末期がんで山口市の病院にいた有馬さんにも証言を頼んだ。衰弱で言葉も出にくい。「明日、来てくれ」。翌日、鬼気迫る能弁な活動家に戻っていた。「今やらんで、どうする…」。次世代に残した言葉の一つ。十日後、帰らぬ人となった。

▲「『援助』でなく『協働』」が口癖だった。ボランティアは、だれのためでもなく、自分の生き方を見詰めることかもしれない。冊子には、話し続ける痩せた有馬さんの写真が載っている。

この記事については
http://www.chugoku-np.co.jp/Tenpu/Te01012501.html　を参照下さい。
なお、この本をご希望の方は新川（巻末参照）までご連絡下さい。

インフォメーション

★公開仏教講座　－親鸞に聞く－

テーマ　**生 老 病 死**　－いきいきと老いていますか？－

講師：藤場　俊基師（金沢教区）

５月２６日（土）　能代市　西光寺　午後２時～４時

５月２７日（日）　大館市　浄應寺　　〃

◆入場料　５００円（１会場）※当日会場に直接おいでいただいても結構です

主催／真宗大谷派（東本願寺）　奥羽教区秋田県北組

★秋田いのちの電話　定期総会及び
「特定非営利活動法人　秋田いのちの電話」設立総会

日　時　４月２２日（日）　定期総会　午後１時３０分～
設立総会　午後２時２０分～
講 演 会　午後３時３０分～

会　場　生涯学習センター分館ジョイナス　２階多目的ホール

講演会　「非行少年の再生への契機」

講　師：小野　広明　氏
（秋田県少年鑑別所首席専門官　臨床心理士）

★医療と宗教を考える会・第167回勉強会

「（仮題）『希望の島』への改革」

講師：神野　直彦　氏　（東京大学大学院経済学研究科・経済学部教授）

日　時　４月２５日（水）　午後６時～

会　場　東京・大朋会館（大朋ﾋﾞﾙ９階）　JR神田駅南口徒歩１分

参加費　正会員　1,500円　　会員外　2,000円

主　催　「医療と宗教を考える会」　TEL　03-3864-7755
Fax　03-5687-6367